

# 博物館探訪

## いしうす 【石 臼】



中央アジアで紀元前7世紀ころに出現したといわれる粉を挽く道具であるが、わが国で一般農家に広く普及したのは江戸初期と考えられる。

上臼と下臼を重ね合わせて、上臼を手動で反時計方向に回転させて穀物などを粉にする。上下の臼面には特有の刻みが彫ってあり、その交差により穀物は中心から円周方向へ、次第に細くなりながら排出される機構をもっている。

粉を均一にする為には、接触部の粗さを調整する必要がある、実際に挽きながら調整するのが臼師の腕であった。

穀物を粉にするのがおもな役割であるが、豆腐づくりにも利用する。

### 編集後記

■表紙の写真は、春のポカポカ陽気の中で遊ぶ、浦幌幼稚園の園児たちです。

■桜満開の昼下がり、聞きなれない鳴き声に我が家の窓を開けると、上空高くに三羽の丹頂鶴が飛んでいました。親子でしょうか。つかず離れずゆったりと何度か旋回して、東山のほうへ優雅に飛んでいきました。ほんの二〜三分の出来事でした。(井)

■掲載された写真は、差し上げますので(本人または家族)お気軽にご連絡下さい。